

平成二十七年 度

「教育の力」発信事業

湖国の親子へ贈る言葉

く今、子どもと向き合うあなたへ贈るメッセージ

ちよつとだけ

「お母さん これみて」

「ちよつとまって」

「お母さん これして」

「ちよつとまって」

「お母さん こっちきて」

「ちよつとまって……」

ねえお母さん……。

その「ちよつと」ってどれくらい？

ちよつとだけ……。

ほんの少しだけ、子どもの方を見てあげて。

きっとその「ちよつとだけ」の時間で、

子どもは笑顔になってくれるよ！

三十三才 女性

祖母が残した言葉

私の両親は共働きでしたので、明治生まれの祖母に育てられました。祖母は、私に何気ない日常生活の中で、いろいろなことわざや話をしてくれました。

今でも心に残っている祖母の言葉です。「ちよちよち、あばば、かいぐりかいぐりおつむてんてん」「朝、元気に目覚めたら感謝する、人が嫌がることは言うたらあかん、一生懸命働くのや。これだけのことをしっかり頭に入れておくのやで。」手をすり合わせ、口に手を当てて両手をぐるぐる回して、頭を優しくなでるといふ動作を交えて、何度も繰り返し教えてくれた姿が浮かんできます。

感謝と思いやりと誠実を身を持って教えてくれた祖母の年になりました。祖母は、私の心の中で生きています。おつむてんてん。

六十才 女性

すごいやん、私

考えてみれば、ものすごい変化である。ほんの数年の間に、のほほんとした娘さんだった私は、三人の子を持つ母親になった。自分一人の世話すらあやしいものだったのに、今の私は家族全員の衣食住を担当している。数年前にはなかった自分の姿だ。もちろん失敗もたくさんあるけれど、いつでも家族の快適な暮らしを思い描いて、毎日走り回っている。でもたまに、疲れてしんどくて、ちよつとイヤに思える日もある。そんな時私は、自分を思いっきりほめることにしている。「すごいやん、私。未来を担う希望を三人も生み出し育ててるんやで。しかも、毎日休まずに。よう頑張ってるわあ。何もできなかった娘さんから大成長やん！」前進あるのみ！母よ、ファイト！

三十五才 女性

笑いあえる親子に

「僕って小さいころ、どんな子だった？」と小学校卒業前に息子が聞いてきた。アレルギーがあった。寝ない。夜泣きの末のドライブ。落ち着きがない。列に並べない。よその子にかみつく。骨折をはじめ数々のけが。思い出とともに、ここぞとばかりに過去の悪行もあばいてやった。

九州から嫁いだ私には親戚も友達もいなかった。夫や一時保育に預け、行くあてもなく車を走らせながら大声で泣いた。周りの人や子育て支援の力など、借りられる力は全部借りた。がむしゃらだった。

「僕はわるい子だったんだねえ。」と、どこか他人事のように笑う息子を見て、思わず私も笑ってしまった。

ふたりとも成長したのだ。

三十八才 女性

成長するって・・・

君が生まれて、はや十八年。生まれた時は、アトピーがひどく皮膚はただれ、続いて食物アレルギー、卵に牛乳等々、それを知らずに口にしたときには、呼吸困難に。またまた、続いて、重度のぜんそく。ぜんそくとはしかを併発したときは、医者から、「今夜が山ですね。」というテレビでしか聞いたことがない言葉を聞き、膝から崩れ落ちたことも…。

そんな君が、今は食事制限もなく、ついこの前まで高校野球に没頭する元気いっぱいの日を過ごしていたね。

今は、遊びほうけている姿を見て、少し注意したくなる時もあるけれど、でも、「今、元気で居てくれてありがとう。」の気持ちの方が勝ってしまったって、笑顔で見守ってしまう。

五十才 男性

素直になかなかなくて

僕の父は、いつも無口で、しかし、怒るととても怖くて、なんだか近寄りがたくて、でも、僕が大好きだった野球を小学生の頃から全面的に応援してくれて・・・。

感謝の気持ちやいろいろ話をしたい気持ちはたくさんあるのに・・・。なぜだか素直に話せない、接することができない。

いつになれば、自分の心を開いて話すことができるのだろうか？

この文を書きながら、自分に問いかけているところがある。親子ってこんなものなのかな？

「親孝行したいときに、親は無し」とよく言われるが、そうなる前には、自分の心を解放したい。

二十一才 男性

みんなで育てる

双子が授かり、子どもが三人になったとき、「私がもう一人いれば。」と思いました。でもその必要は全くありませんでした。子どもたちはすてきな笑顔で、かわいいしぐさで、いろんな人を引き付けます。そしてみんなが世話を手伝ってくれました。なかでも、双子のお兄ちゃんになった上の子は、甘えん坊から、弟をかわいがり、遊んでくれる頼もしい助っ人に。一人だけで何でもしようと思ひ、できないことばかり、思っていました。そうではないことが分かりました。みんなにかわいがられ、育っていくことで、親も子も学ぶことがたくさんありました。

次は子育て真っ最中の方を支援、恩送りをしていきたいと思ひます。

子は親の言葉を聞いて育つ

我が子が中学三年生になった時、「どこの高校に行ったのか、なぜそこへ行ったのか」をたずねてきた。進路のことを考え出したな、と思ひながら、自分の話をした。

私も親からいろいろな話を聞いてきたことを覚えていゝる。学校時代の話、戦争当時の生活も聞いた。また、親が近所の人や親戚の人と話をしているのを聞いて、あいさつのしかたや言葉づかいを覚えた気がする。隣の家にも物を届ける時の言い方や、雪道を通学する時の注意など、学校では習わない事も教えてくれた。が、私は横を向いて聞いていた。

今、自分の子に話をすると、生返事だが、聞いていることだろう。背中に向かつてでも、いろいろと語ってやりたいと思ひている。



平成 27 年(2015 年)11 月発行
滋賀県教育委員会